

お知らせ:東洋文庫にミュージアムがOPENします

第6回特別展では、磯吉の聞き書きである「魯西亜国漂船聞書」を借用展示いたしました。吉村昭先生が『大黒屋光太夫』を執筆するにあたり、参考にされた漂流記で、大黒屋光太夫からの聞き取りにより成立した「北槎聞略」と双璧をなすと言っても過言でない程、内容も充実しており、また美しい挿絵も魅力の漂流記です。当館でも、いつかは借用展示したいと思っていた代表的な神昌丸の漂流記の一つです。

その「魯西亜国漂船聞書」を所蔵するのが、東京都文京区にある財団法人・東洋文庫です。三菱財閥の創始者である岩崎彌太郎の長男で、三菱第3代当主の岩崎久彌氏が、1924年に設立し、以後アジア最大の東洋学センターとして世界的にも有名な図書館です。

その東洋文庫が、現在、ミュージアムを建設中です。開館5周年特別展には、ミュージアム建設中のお忙しい時期にも関わらず、資料をお貸しくださいました。借用・返却の際に工事中の建物を拝見しましたが、本当に立派なミュージアムになりそうです。オープンは、2011年10月20日(木)の予定ということですので、来年の秋は是非お出かけください。東洋文庫が誇る国宝や重要文化財を見ることができるようになるのが、今からとても楽しみです。



特別展報告

- * 会期 2010年10月6日(水)～11月28日(日) 開館日数40日
- * 入館者数 1199人 平均30人/日
- * 刊行物 図録 1500冊 関係機関・個人送付、無料配布
大黒屋光太夫記念館だより「大光」12号 2500部 無料配布
- * 取材 ケーブルネット鈴鹿、ケーブルテレビ四日市、毎日新聞など
- * 関連事業 パラライカミニコンサート＆『おろしや国酔夢譚』・『大黒屋光太夫』朗読会
2010年11月14日 13:30～15:00 参加無料 約130名参加

隣接する旧若松公民館の取り壊し工事が始まります

記念館に隣接する若松公民館の取り壊し工事が12月から始まります。12月中は建物内部の取り壊し作業をし、1月中に数日間かけて建物の解体を行うとのことです。来館の皆様には、大変なご迷惑をお掛けいたしますが、予めご了承ください。詳しい工事の日程などは、決まり次第、記念館ホームページ(<http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/kodayu>)でお知らせいたします。また、解体工事後の公民館跡地は、記念館の駐車場となる予定です。今まで手狭な駐車場でご迷惑をお掛けいたしまして申し訳ございませんでした。

編集後記

開館5周年記念展では、漂流記と文学をテーマに展示を行いました。今回の特別展では、大黒屋光太夫を、歴史上の人物としてではなく、文学作品の主人公としてご紹介しました。1点1点熱心に資料をご覧になる方が多く、大変嬉しく感じました。展示をご覧になって文学作品との思い出をつづったお手紙を下された方や、ご所蔵の漂流記に関する本をご寄贈下さった方などもあり、改めて皆様の思い入れの深さと文学の力を感じることができました。

また、井上靖先生・吉村昭先生に関する文学館や関係者とも新たな結びつきができたように思います。井上靖文学館および井上靖ふるさと会の皆様は、会期中に記念館を訪問してくださいました。そして、1月に伊豆市で開催される井上靖先生を偲ぶ催しでは、「おろしや国酔夢譚」の上映をしてくださるそうです!点と点の活動が線に繋がった嬉しさを感じました。このような交流の輪をさらに広げ、そして深めていければ、きっと新たな活動の場が広がるのではと思います。

- 「翌檜忌(あすなろき)」没後20年、井上靖を偲び、顕彰する集い
日時:2011年1月30日(日) 会場:天城温泉会館
内容:10時～11時 墓参(熊野山墓地)
11時～12時 井上靖作品読書感想文コンクール発表・表彰
13時～15時 映画「おろしや国酔夢譚」上映会
参加費:入場無料・全席自由 お問い合わせ井上靖文学館 電話 055-986-1771

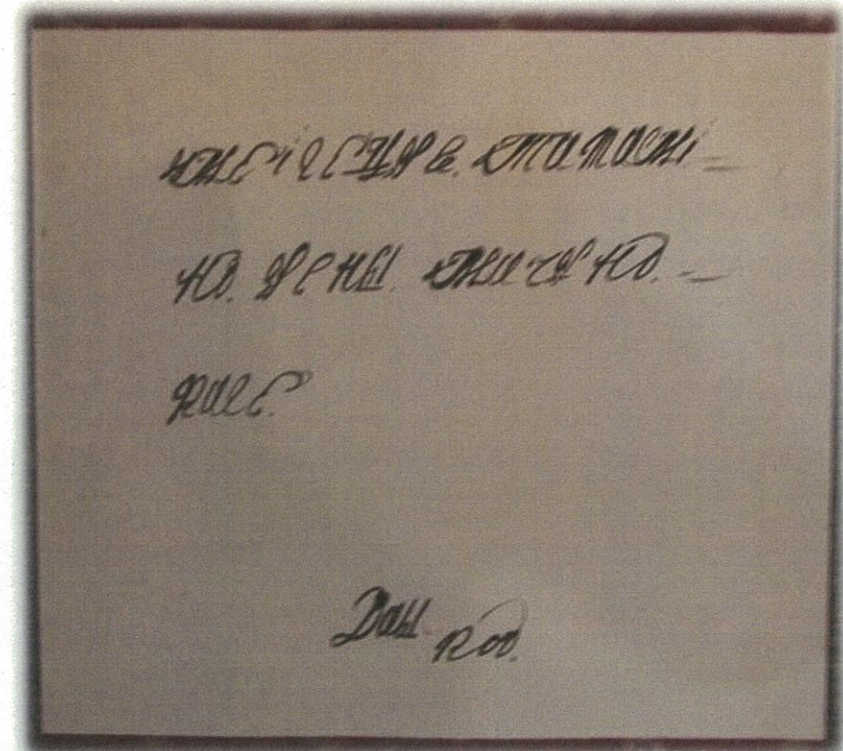
井上靖文学館HPより抜粋 http://www.clematis-no-oka.co.jp/011_vasushi/011_sched.html



大黒屋光太夫記念館だより「大光」第13号

大黒屋光太夫

2010年12月発行



大黒屋光太夫 墨書「メイゲツヤ タタミノウエニ マツノカゲ」

平成22年度 冬の企画展



大黒屋光太夫とロシアの文字



今年も冬の企画展は、光太夫直筆のロシア文字墨書を多数展示しています。光太夫が書いたロシア文字は、全国で40点余り残っていますが、その内の約半数を鈴鹿市が所蔵しています。光太夫の墨書を一堂に見られるのは、大黒屋光太夫記念館だけ!毎年冬の恒例展示として定着させていきたいと思っております。

写真の資料は「名月や曇みのうえに松の影」という榎本其角(1661～1707)の有名な俳句を大黒屋光太夫がロシア文字で書いたものです。この榎本其角は、松尾芭蕉の高弟で蕉門十哲の第一と言われた人物です。近江膳所藩の医師の子に生まれ、荻生徂徠の私塾に隣接して江戸座を開きます。膳所藩から分家し徂徠と交流のあった神戸藩との繋がりもあったかもしれません。また、其角の墓は二本榎の上行寺で、桂川甫周と同じ菩提寺です。不思議な縁がある人なのです。

編集・発行: 鈴鹿市文化振興部 文化課 TEL059-382-9031
大黒屋光太夫記念館 TEL&FAX 059-385-3797

開館5周年記念事業終了しました

大黒屋光太夫記念館開館5周年記念に当たり、各関係者の皆様には、終始心温かいご支援とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

お陰をもちまして、記念事業は滞りなく無事に終了することができました。

開館5周年記念特別展「海のむこうへのあこがれ—漂流記と漂流文学—」は、文学作品を通して大黒屋光太夫やその他漂流者を御紹介する特別展でした。これまで記念館を訪れた事のない方や歴史にあまり興味がない方にも記念館を知ってほしいと思い、企画した展示でした。約1200名の方々にご来館いただくことができ、これまでの展示と比べて、ご夫婦連れや若い方の来館も多くありました。

また、関連事業として行いました「バラライカミニコンサート&『おろしや国酔夢譚』『大黒屋光太夫』朗読会」には、定員を超える応募をいただきました。約120名の方が若松公民館多目的ホールに集い、バラライカの音色と2つの文学作品に耳を傾けました。



両イベントとも沢山の方々にご参加いただきまして、本当にありがとうございました。

- ★朗読をお願いした河原徳子様から、『みなさまから、「良かった!」の声、直接に沢山いただきました♪何より、企画の視点の良さに惚れて、お引き受けた仕事でしたが、河原がオジャンにしないで済んだようで…ホッとしています(笑)。』というメールをいただきました。
- ★ギターをお願いした長尾和彦様からも『とても内容の濃い企画だったことで、忘れられない出来事の一つとなりました』というお手紙をいただきました。
- ★バラライカの北川翔様のブログ(<http://www.sho-kitagawa.net/blog>)でも、当日のことを書いてくださっています。
- ★参加者の皆様からも「良かった」「感動した」というお声をたくさんいただきました。ありがとうございました。

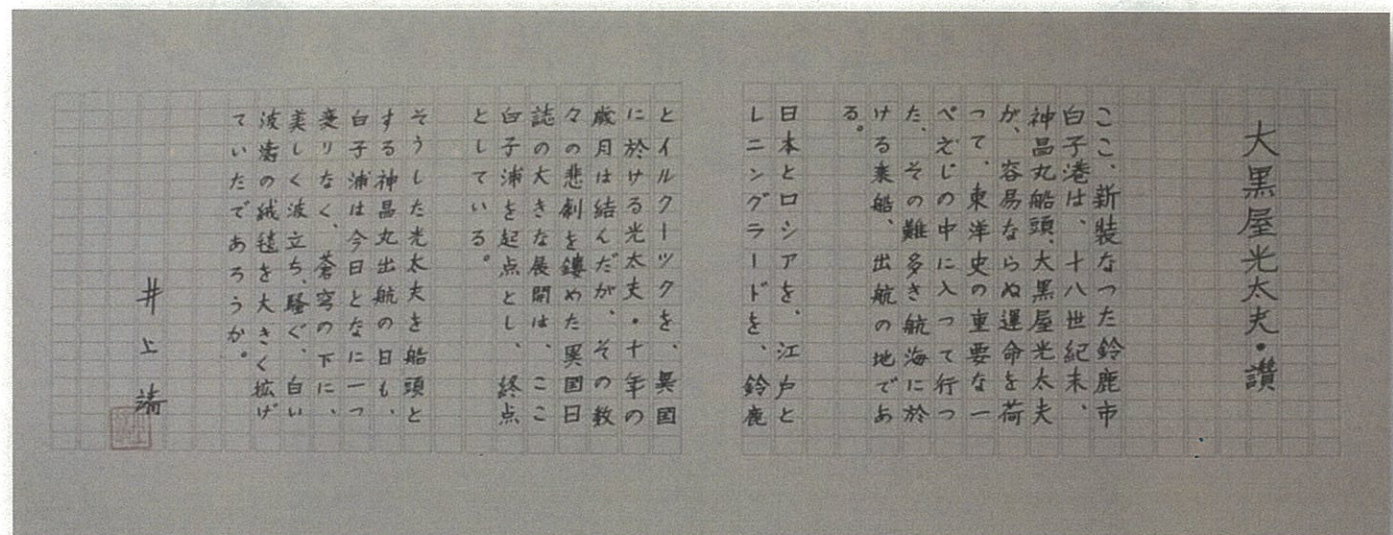
収蔵資料の紹介

開館5周年記念展では、白子新港緑地公園にある井上靖文学碑の原稿を記念館で初めて展示いたしました。

文学碑を訪れたことのある方からは、「井上先生のお声に感動した」とのお声を頂戴したり、この原稿を展示室ではじめて見られた方からは、「文学碑を訪れたいので場所を教えてください」と訊ねられたり、今回の特別展でも反響の大きかった展示資料の一つとなりました。

白子新港緑地公園は、平成元年から整備が始まり、平成4年に完成した伊勢湾を望む風光明媚な公園です。文学碑の原稿は、平成2年6月に井上先生から当市に寄せられ、平成4年4月11日に碑の除幕をみました。井上先生は、碑の完成を待たず平成3年1月に残念ながら他界されてしまいましたが、除幕式には、井上先生のご令室・ふみ様をはじめとする御遺族21名や当時の根室市長、加藤九祚氏などが参加されました。

文学碑は、縦1.2m×横3m、黒花崗岩で作られた大きなもので、文学碑とともに作られたモニュメント「刻(とき)の軌跡」は、三村力氏(飯野高校教諭)の作品で、高さ6m、光太夫の異国で過ごした10年の歳月を10段にねじりながら積み上げた白御影石で表現しています。



大黒屋光太夫・讃

ここ、新装なった鈴鹿市白子港は、十八世紀末、神昌丸船頭、大黒屋光太夫が、容易ならぬ運命を荷って、東洋史の重要な一ページの中に入って行った、その難多き航海に於ける乗船、出航の地である。

日本とロシアを、江戸とレニングラードを、鈴鹿とイルクーツクを、異国に於ける光太夫・十年の歳月は結んだが、その数々の悲劇を鏤めた異国日誌の大きな展開は、ここ白子港を起点とし、終点としている。

そうした光太夫を船頭とする神昌丸出航の日も、白子港は今日となに一つ変わりなく、蒼穹の下に、美しく波立ち、騒ぐ、白い波濤の絨毯を大きく拡げていたであろうか。

井上靖

井上先生が『おろしや国酔夢譚』を執筆された頃、大黒屋光太夫は江戸に幽閉されて生涯故郷へ帰ることはできなかったというのが定説でした。しかし、昭和61年に帰郷文書(市指定文化財)が発見され、大黒屋光太夫は一時的な帰郷を許されていたことがわかりました。

井上先生は、この資料発見のニュースにどのようなお気持ちで接されたのでしょうか…。それは定かではありませんが、この文学碑の原稿の「ここ白子港を起点とし、終点としている」という部分に、井上先生のお気持ちが表れているように思えてなりません。地元の研究者に井上先生が贈った言葉は「私には 正確なものだけが美しく見える」でした。この二つの言葉を重ね合わせると、井上先生の誠実なお人柄が偲ばれる思いがするのです。



文学碑とモニュメントの全景